

これからの未来を担う 子どもたちと共に

小松沙希

宮城県気仙沼市 学童保育指導員

小学校の敷地内。校舎に隣接して建っている小さなプレハブの建物。三年生までの子どもたちが「たーだいまー」と帰ってくる場所。それが私の職場です。

あの日あの時、たまたま勤務を変わってもらって自宅にいた私は、二人の幼い娘たちを抱えながら目の前ですべてが流され、一瞬にして「被災者」になりました。

時を同じく、学童保育には指導員二名と三年生二名が登所していました。下校時間に襲ってきた大地震。「早く止まって」と誰もが願いながら揺れがおさまるのを待ち、急いで校庭に避難しました。校舎からも着の身着のまま避難する子どもたち。大津波警報が発令され、保護者が迎えに来た子もいましたが、大半の子は「寒い、怖い」と膝を抱え、小さくなりながら震え、泣いていたそうです。

ここでは危険と小学校の先生と判断し、もつと高台にある中学校へと全員で向かいました。しかし、この時すでに、小学校のすぐ下まで津波は来ていたのです。中学校に避難した時、後から来た生徒が、「俺んちなくなつた」とつぶやく声が聞こえてきたといいます。

それから約二週間、場所によっては二か月以上、電気と水道が使えない生活が続きました。しかし、不謹慎なところかもしれませんが、電気が復旧するまでの間の、地域と家族で協力しあっていた貴重な時間があったことは、家族・地域との関わりの大切さを感じられ、この時間がとても大切だったと思います。

電気が復旧してすぐ、「学童保育を開所してほしい」という保護者からの声もありましたが、学童保育の裏にあ

て、子どもたちの笑顔がなによりのはげみでした。

徐々に利用人数も増え、活気づいてきた学童保育内でしたが、遊んでいるなかでも流された家族の話や、なにかを思い出しながら描く絵は震災のものだったり、心が痛むこともありました。そのことをお迎えに来た保護者に話すうちに、大人も先の見えない不安を抱える人が多かつたことがわかってきました。

私自身、車には物資の服を詰めた衣装ケース、食糧、瓦礫のなかから見つけた思い出の品を常に乗せ、大きなリュックにすべてを詰めこんで出勤しては、津波がきて周りが瓦礫だらけの電気が復旧していない実家へお世話になり行く。恐怖となりあわせの生活が続いていました。そんな状況だからこそ、保護者と深く家庭に入り

こむほどお話ししたし、いろんな不安ややりきれない思いも聞きました。私もつい、自分の話を聞いてもらい、お互いに心を開いてお話しすることで、より信頼が深まったような気がしました。

しかし当時は、「子どもたちを預かっているかぎり、絶対に守る！」という気持ちを確認する反面、夜になり波の音が聞こえると、「よその子を守ることで我が子は守れるのか」という思いが浮かび、生活再建への不安にも追いやられ、精神的につらい時期もありました。

それから徐々に、仮設住宅への入居が決まり始め、自宅と呼べる空間ができたことで心に少し余裕ができてきました。全国からボランティア活動の声がかかり、学童保育でも、楽しい時間過ごさせてもらいました。時には県外

る体育館が遗体安置所になっていたため、小学校の再開とあわせることになりました。一〇日前から準備を始め、「家庭も学校もおちつかない状況だからこそ、学童保育は明るく変わらない場所でしょう」と指導員の心を一つにして、二〇一一年四月二日、再開することができました。

自宅が被災した、職場が被災し仕事再開のめどがたたない、失業したなど、ほとんどの家庭が震災の影響を受けていたので、四月の再開時は定員三〇名に対し、七名の利用しかありませんでした。そんななかでも登所した子どもたちは以前と変わらない笑顔で過ごしてくれました。避難所から通うために昼食の用意ができないと利用を渋っている家庭もあったので、物資でいただいたお米やおやつを持ち寄り、学童保育でおにぎりを握って食べさせたりもしました。私たちにとつ

の学童保育から写真つきメッセージや手作りのプレゼント、遊び道具を支援していただいたり。私たちを思ってくれている人たちがこんなにいるんだと思うと心が救われました。

そして、市内の指導員が集まり、震災の影響で生じた問題や、ボランティアに来ていただいたことなどを報告しあううちに、「いつかこの気持ちを全国のみんなに伝えたいね」と話すようになりました。

* * *

二〇一二年一〇月に埼玉県で開催された全国学童保育研究会。この時も、開催地の埼玉県内で募金活動が行われ、「ぜひ被災した地域のみなさんに参加してほしい」とありがたいお言葉をいただきましたこと、そして全国のみなさんから義援金をお寄せいただいたこともあつて、私たちも感謝を伝えるに当たると、宮城から参加することが

できました。

全国の方とお話しするなかで、私たちが思っている以上に被災した地域のことを心配してくれていて、さらにこれからのことを考えてくれていることにおどろきました。直接、お会いして、みなさんに感謝の気持ちを伝えることができ、とてもすてきな時間を過ごさせていただきました。

* * *

ある方に、「あの時はどんな気持ちで過ごしていたんですか？」と聞かれました。その時、私はきちんとしたことをお答えできませんでしたが今回、文章を書いたことで気がつきました。

あの時、私は指導員でもあり母親でもありました。守るものがあつたから自分を保っていたような気がします。家がなくても服がなくてもお金がなくても、生かされた命、守りた

い命があるから、前を向いて生きるしかなかったのです。震災を経験し、被災者になったことで、命の大切さ、地域とのつながり、支えてくれる人への感謝の気持ちを身を持って痛感しました。

* * *

この場をおかりして、支えてくださっているすべての人たちへ感謝申し上げます。

つらい経験を乗り越え、これからの未来を担う子どもたちが希望を持ち成長していけるように、共に育てていきたいと思えます。ありがとうございました。

*編集部注：現在は、物資や遊び道具もまさにあつていっているとのこと。